幕末維新懐古談

その頃の床屋と湯屋のはなし

高村光雲

青空文庫

床屋の話が出たついで故、ちょっと話しましょう。当時の髪結床は、今のように小ざっぱりしたものではなく、特にこういう源空寺門前といったような場末では、そりゃ、じじむさいものでした。

源空寺門前という一町内には、床屋が一軒、湯屋が一軒、そば屋が一軒というようにチャンと数が制限され、その町内の人がそのお華客で、何もかも一町内で事が運んだようなものであります。で、次の町内のものが、その床屋へ飛び込むと、変な顔をして謝絶ったりしたものです。

床屋はちょっと今のクラブのような形で、一町内の寄り合い所なり遊び場でありました。床屋の主人は何んでも世話を焼いて、此所で話が決まるという風。お祭礼の相談、婚礼の話——夫婦別れの悶着、そんなことに床屋の主人は主となって口を利いたものです。

床屋は土間で、穴の明いた腰かけの板に客が掛け、床屋は後に廻って仕事をする。側に鬢盥というものがあって、チョイチョイ水をつけ、一方の壁には鬢附け油が堅いのと軟かいのとを板に附けてある。客は毛受けという地紙なりの小板を胸の所へ捧げ、月代を剃ると、それを下で受けるという風で、今と反対に通りの方へ客は向いていた。

夜分は土間から、一本の木製の明り台が立っていて燈心の火が細く点されていた。でも、結構、それで仕事は出来たもの。すべて何店によらず、小さな行燈一つを店先に置いて、それで

店の人の顔も見えれば、書き附けの字も見えたものだ。明るさにおいても、ちっとも今とは違いはしなかった。燈火が明るくなればなるほど、人間の眼が暗くなるので、昔はそれでよかったものです。

湯屋では、八ケンというものが男湯と女湯との真ん中に点いていた。柘榴口を潜って這入るのです。……柘榴口というのは、妙な言葉だが、昔から、鏡磨ぎ師は柘榴の実を使用ったもの、古い絵草子などにも鏡研ぎの側には柘榴の実がよく描いてある……でその名の意は、屈み入る（鏡入る）の洒落から来たもの、……むかしはすべてこう雅なことをいったものです。

床屋は大人が三十二文、子供は二十四文、湯屋は八文であった。

青空文庫情報

底本：「幕末維新懐古談」岩波文庫、岩波書店
　1995（平成7）年1月17日第1刷発行
　1997（平成9）年5月15日第6刷発行
底本の親本：「光雲懐古談」万里閣書房
　1929（昭和4）年1月刊
入力：山田芳美
校正：土屋隆
2006年1月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幕末維新懐古談
その頃の床屋と湯屋のはなし

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　高村光雲
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/